數眼鏡　表中裏如龜甲爲稜形、或五或六隨數見、

凡水精出於加賀者、色潔白佳、出於日向者次之、他不佳、近世多以硝子爲之、試法水精粘舌稍冷也、斜覘之純白也、硝子帶微青色、

凡琢眼鏡之垢職、浸木灰汁一宿可磨去、尋常輕用唾可拭、但忌吃煙草未經時者唾、

〔萬金產業袋三〕目鏡

丸目鏡　曖曖、靉靆、これ常に用ゆるの目がね、若年、中年、老年のわかちあり、若年は玉うすく、みな硝子也、中年は段々と老年にいたるほど玉厚く、本水晶を用ゆ、すいしやうは上にいふごとく、近江もいづれども、日向水晶ならでは、目がねには宜しからず、合せ砥にてかたむらなく、至極よくすりあぐべし、びいどろ玉は、中古唐わたる所、厚壹分あまり、大根の輪切のごとくにして來るを、和にて又丸みをなをし、兩面をよくすり、あつき薄きは中年若年、その程々に仕たつる、又朝鮮より來る白びいどろの菊ちやわんあり、その破たるを一ッにし、火消つぼの蓋に入、その上に又同じ通のふたをあをのけにのせ、それに炭火をつよく熾し、一時計も置に、右のちやわんみなとけて、蓋のうへに一ッに溜、扨上の火をとり、蓋ながらさまし置ば、いかにもむらなくとけて、當に淪たまるを、よき程にまろくし、兩めんを摺て、右目がねの玉につかふ、薄き厚きはその好によるべし、緣は象牙、くじらの髭、鵜のほね、眞鍮等、家は箱入、薄皮まがひ、黑ぬり、せいしつ、朱ぬり略○註なんどみな唐紛也、草なるは、經木板に紙ばり、墨ぬりの上をすり漆して用ゆ、いかにも安物の仕立也、

近目鏡、近視の人是を用ゆ、もり玉とて、玉の表に少しふくらをつけ、うらをまんろくにする也、尤水晶にて製す、びいどろは用ひず、

瑕目がね、刀わき指のきずをあらため見るに用ゆ、右に同じくもり玉をかけにして、少し相違あり、他事に要なし、尤水晶玉也、

虫目がね、これもこりだま、筒のうちに仕入る、

遠目鏡、上百里を下十里五里三里等あり、かな筒あり、なまり筒あり、内にいる